

令和 6 年度

「いわての復興教育」

実践事例集



令和 7 年 3 月
岩手県教育委員会

いわての復興教育推進事業「震災学習列車活用スクール」実践事例

学校名：山田町立山田小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、令和2年4月に山田町内の6つの小学校（大沢、山田北、山田南、織笠、轟木、大浦）が統合してできた開校5年目の学校である。さらに、今年度4月、同町船越小学校と統合し、全校444人（令和7年1月現在）の学校となり、8月には山田町飯岡地区にあった旧山田南小学校校舎から同町織笠地区の新校舎へ移転し、児童・校舎共に新たなスタートを切った。学校経営の基盤に「いわての復興教育」を位置付けた教育課程を編成し、系統性のある復興教育に力を入れて取り組んでいる。

統合の前年には、三陸鉄道や沿岸地域の復興を実感すること、震災について改めて理解を深め、避難や防災への意識を高めることをねらいに、各学校の6年生が全員集まり、震災学習列車で実施した。以来、上記のねらいを達成すべく毎年、復興教育の一環として、三陸鉄道や釜石市鶴住居の「いのちをつなぐ未来館」を訪問し、震災にかかわる学習を実施している。

山田町の児童にとっては、各家庭及び山田町の各地区の震災被害及び復興状況が一樣なものではないため、震災の記憶を継承し、共通の学習土台を作る上で、有意義な事業であると考え。本校では、5年生の「総合的な学習の時間」のテーマに位置づけ、震災やその復興、防災などについて学ぶこととしている。

II 取組の概要

1 事前学習

5年生の「総合的な学習の時間」のテーマを「山田の語り部になろう」と設定し、釜石の最年少語り部の佐々木さんを例に、学習の見通しを持たせた。自分たちの体験したことや学んだことを多くの人に広め、思い出してもらったり知ってもらったりすることで、震災での経験や復興への思いの風化を防ぎ、防災に関する意識を高めていくことを目標とした。

その後、山田町の防災学習会へ参加し、防災や避難の仕方の講演を聞き、テントや簡易ベッドの設営、参加者への炊き出し（おにぎりづくり）、山田の語り部（大川さん、昆さん）から震災当時の話を聞いた。町の婦人部の皆さんとの交流もあり、震災の様子や防災について話を聞いたり、実際に様々な活動を体験したりととても有意義な機会となった。



＜事前学習で学んだこと＞

- ・東日本大震災の被害や山田町の当時の様子
- ・山田町の震災からの復興の様子
- ・防災や避難の仕方、防災マップの活用
- ・避難所での過ごし方、避難時の行動について

2 震災学習列車の活用

（1）震災学習列車

＜参加者＞ 5年生児童63人、引率5人

＜日 程＞ 令和6年11月11日（月）

9:25～10:00 三陸鉄道乗車（織笠駅～鶴住居駅）

10:15～12:00 いのちをつなぐ未来館 見学
防災ウォークラリー

13:20～15:00 鶴住居地区フィールドワーク

15:10 学校着 ふりかえり



三陸鉄道 織笠駅から鶴住居駅まで乗車し、震災前と現在の様子を比較しながら、震災のことや避難したときの様子、被害や現在の状況、風景や街並みの変化などを踏まえながら、話を聞くことができた。

震災当時6年生であった本校の卒業生であるガイドさんから、発災時の学校での様子やその後の暮らし

方、学校での出来事などを聞くことで、震災によって大きな被害を受け、そこから復興してきたことをより実感できたようであった。

そして、山田町内を列車で進みながら、旧織笠駅や織笠川付近での説明を聞き、当時の写真と今の風景を比較することで現在は建物等が何もなくなった現実を目の当たりにし、東日本大震災の津波で大きな被害があったことを実感したようだった。列車の中ではクイズに答えながら震災について考え、自分たちの住む沿岸地域で実際に起こった震災について多くのことを学ぶことができた。

(2) いのちをつなぐ未来館

ア 未来館館内ガイド、語り部

施設では、未来館の見学や語り部さんから震災についての学習をするグループと防災ウォークラリーを実施するグループの2つに分かれて活動を行った。

震災当時中学生だった語り部さんの説明を写真や資料をよく見て、大事なことを聞き逃さないようにしっかりとメモをとりながら学習に取り組んでいた。とても真剣な表情で話を聞いていて、どの子も自分事として捉え考えているようであった。特に、鵜住居小学校の児童と釜石東中学校の生徒が一緒になって避難した様子については、「自分だったらどうするだろう。」とその場面を想像しながら聞いている様子だった。



イ 防災ウォークラリー

館外で行われた「防災ウォークラリー」では、施設周辺に設置されたクイズをグループごとに解きながら防災について学ぶことができた。日頃当たり前に分かっているようなことでも、よく考えて行動しなければならないことやよく知らなかったことなど、一人一人が防災について考えることができた。最後に、クイズに関する詳細な説明を聞き、防災に

ついて知らないことがあることに改めて気付くことができた。自分や周りの人の命を守るために、今回学んだことをこれからの生活に生かしていきたいと感じたようだった。



(3) 鵜住居地区フィールドワーク

今年度は、震災時、鵜住居小学校の児童と釜石東中学校の生徒が避難した経路を実際に歩いて移動する活動を取り入れた。事前に未来館内で説明を受けている際に、午後の活動として実際に避難した道を歩いてみることを知らせ、児童に意識付けを行った。そして、当時学校のあった釜石鵜住居復興スタジアム付近から海岸からの高さや避難に要した時間等を意識しながら、それぞれポイントとなる場所を目指して歩き始めた。

途中、ございしょの里付近では、当時のがけ崩れや建物の様子がそのまま残されており、地震や津波の恐ろしさ、些細な兆候を見逃さず避難することの大切さを目の当たりにすることができた。また、人員確認のためには整列したり冷静に話を聞いたりしなければならないこと、自分たち小中学生だけでなく幼児や地域の方々が協力しながら移動したこと、津波から避難するためにできるだけ高いところを目指すことなど実際にその場でなければ体験できない多くのことを学ぶことができた。



3 事後学習

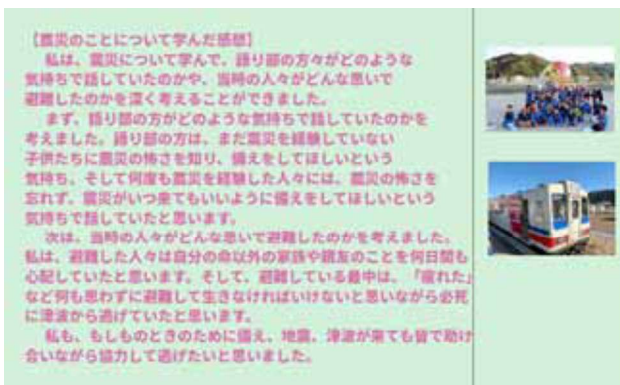
三陸鉄道やいのちをつなぐ未来館、防災ウォークラリー、フィールドワーク等の体験を振り返り、学んだことや感じたこと、これから生かしていくことなどのまとめを行った。発表のためスライドに表し、保護者に津波や地震の怖さ、防災の大切さについて伝えることができた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 児童の感想より

- ・津波が実際に来て避難することになったら、地域の人たちと協力して自分たちで考えて行動することが大切だと分かりました。
- ・津波は何回も繰り返し襲ってくるので1回戻ったからと安心しないで、「もっと高いところに」と思いながら逃げるということを知りました。
- ・避難訓練はただやればいいことじゃなくて、真剣に集中してやらなければと改めて思いました。
- ・この学習を生かしてどのような行動をとればよいか。
①避難場所と防災センターを区別する②家の近くやよく行く場所の避難経路や危険なところをハザードマップで確認する③防災リュックを準備する④避難訓練に参加する⑤避難訓練はでたためにやらない、この5つのことを大切にしていきたいです。



2 成果

- (1) 5年生の総合的な学習の時間に「山田の語り部

になろう」をテーマとして設定することで、様々な学習に関連付けて学ぶことができた。山田町の震災被害や復興についてあまり知る機会がなかった児童にとって、この学習は非常に意義深く、避難の仕方や命を守る行動について体験を通して知ることができ、自然災害への心構えについて学ぶことができた。

- (2) 震災の体験をしたガイドさんの話を聞き、まちの変化の様子を実際に見ることで、山田町や様々な地域で復興のために尽力している方がいることを知った。今年は「震災学習列車」だけでなく、山田町の防災学習会に参加し、改めて地域の素晴らしさや人のあたたかさに触れ、ふるさとのよさを実感することができた。

- (3) 「山田の語り部」として体験したり学んだりしたことを伝えるという相手意識をもって活動に入ったことで、保護者や地域の方への学びのフィードバックができた。また、最後まで目的意識をもって活動することができた。さらに、県立山田高校との連携を図り、これまでに起きた災害での被害の様子や津波記念碑に込められた思いなどを学び、伝承・継承について考えることができた。

3 課題

- (1) 「震災学習列車」やいのちをつなぐ未来館での学びを中心にまとめを行ったため、自分たちの住む山田町について震災や復興についての学びが少なかった。震災学習列車での体験をきっかけとし、山田町のことについて学ぶためには、どうすればよいか、各種資料や学ぶ場の設定、語り部さんからのお話などを取り入れていきたい。
- (2) 総合的な学習の時間や各教科の学習内容の系統化を図り、より吟味した活動計画の立案、教科横断的な取り組み（カリキュラム・マネジメント）を進めたい。そして、次年度以降も、地域の実態や児童の特性を踏まえた本校独自の持続可能な復興教育を推進していきたい。
- (3) 学んだことをスライドにまとめ、自分たちの思いを自分なりの言葉で表現し、相手意識・目的意識をもって発信することができた。今後、学んだことを自分たちが住む町「ふるさと山田」へ還元する発信の在り方について考えていきたい。